

坂東虎三

儒一編

初編

芳川春濤校閱
岡本起泉編輯
揚洲周延圖畫

島鮮堂
壽梓



35

30

25

20



楊海周延策

初編上

A489

48-8183

坂東

彦

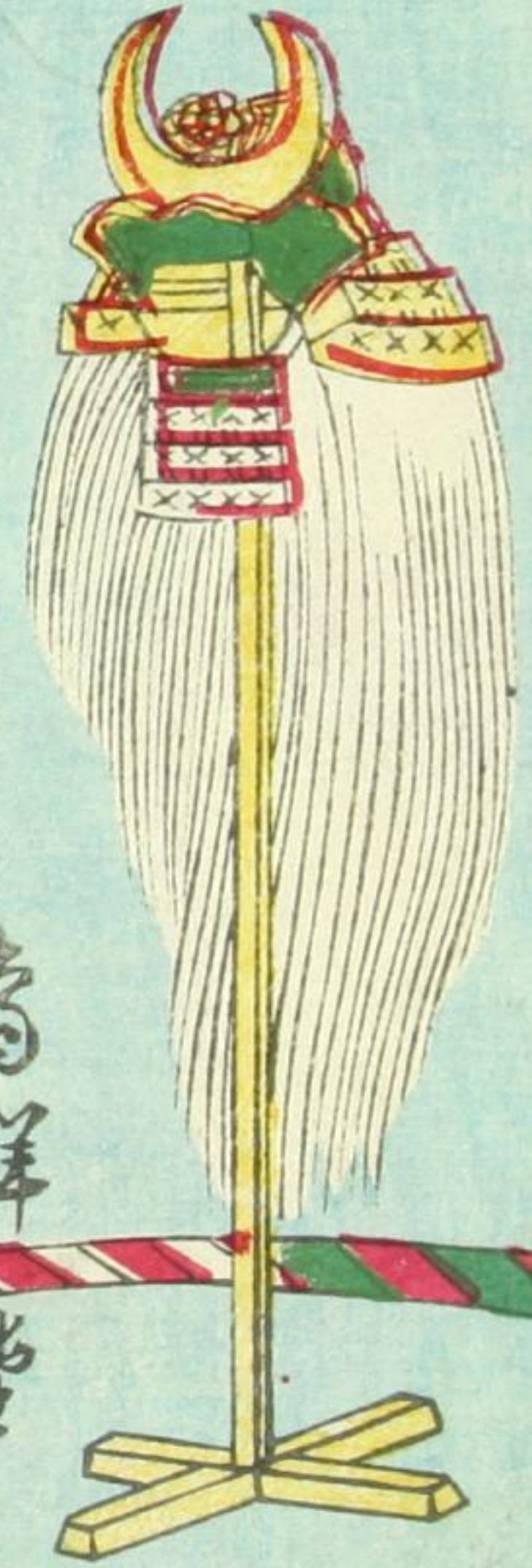
三

倭一流

初編

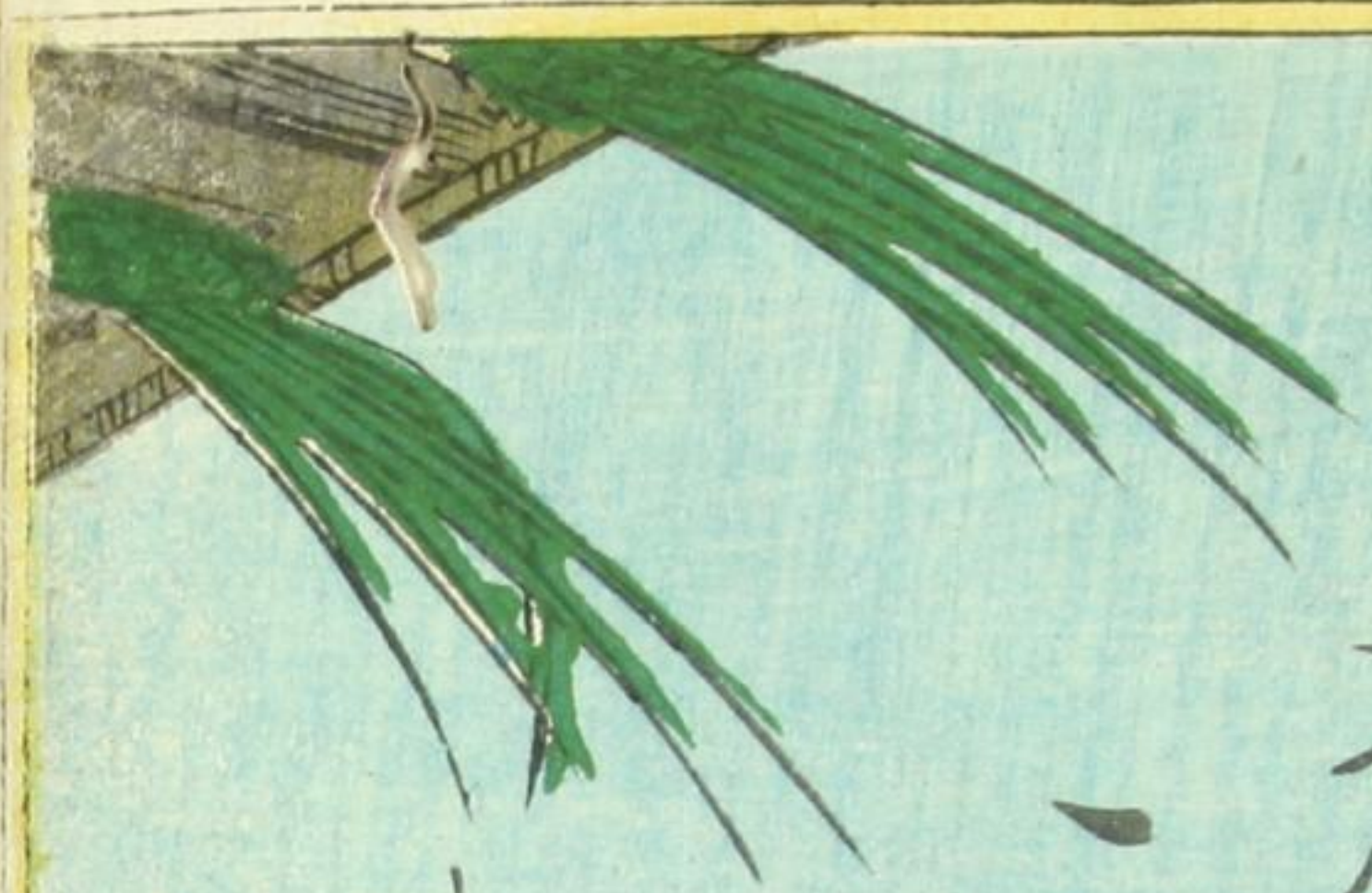
その本然
目近五

上の巻



名四餅

梓



近世の傑優中奈落の底を深き異負を受其名と譽と共に高きも
多かれど真の大極上上吉兼るの評を下なき蓋一此坂東彦三郎は其
技藝の巧且妙ある已に當世外人の知る所なれ今更我輩が長口上
と俟て新富座の瓦斯燈より明らなる而して其一世の事跡亦
自らの別欄として記さる事多し既小口碑の傳る如く彼横濱の一
豪高を我の天下の何某なりと自負せしに對し我の日本一の彦三郎云々と
即坐しお先まつら馬の増長坊が鼻と挫きたるを自ら尋常の俳優
と異なる氣象を具へたる其顛末成聞がまよしく写し取る此冊子の
外題を其語と其まづ倭一流は手強き綱島が需め應じと紋所の鶴乃
千年龜蔵が斯も仕込し丹精を尚万代に傳へんと先其気で穿ちたる

明治十三年四月初旬

岡本起泉題

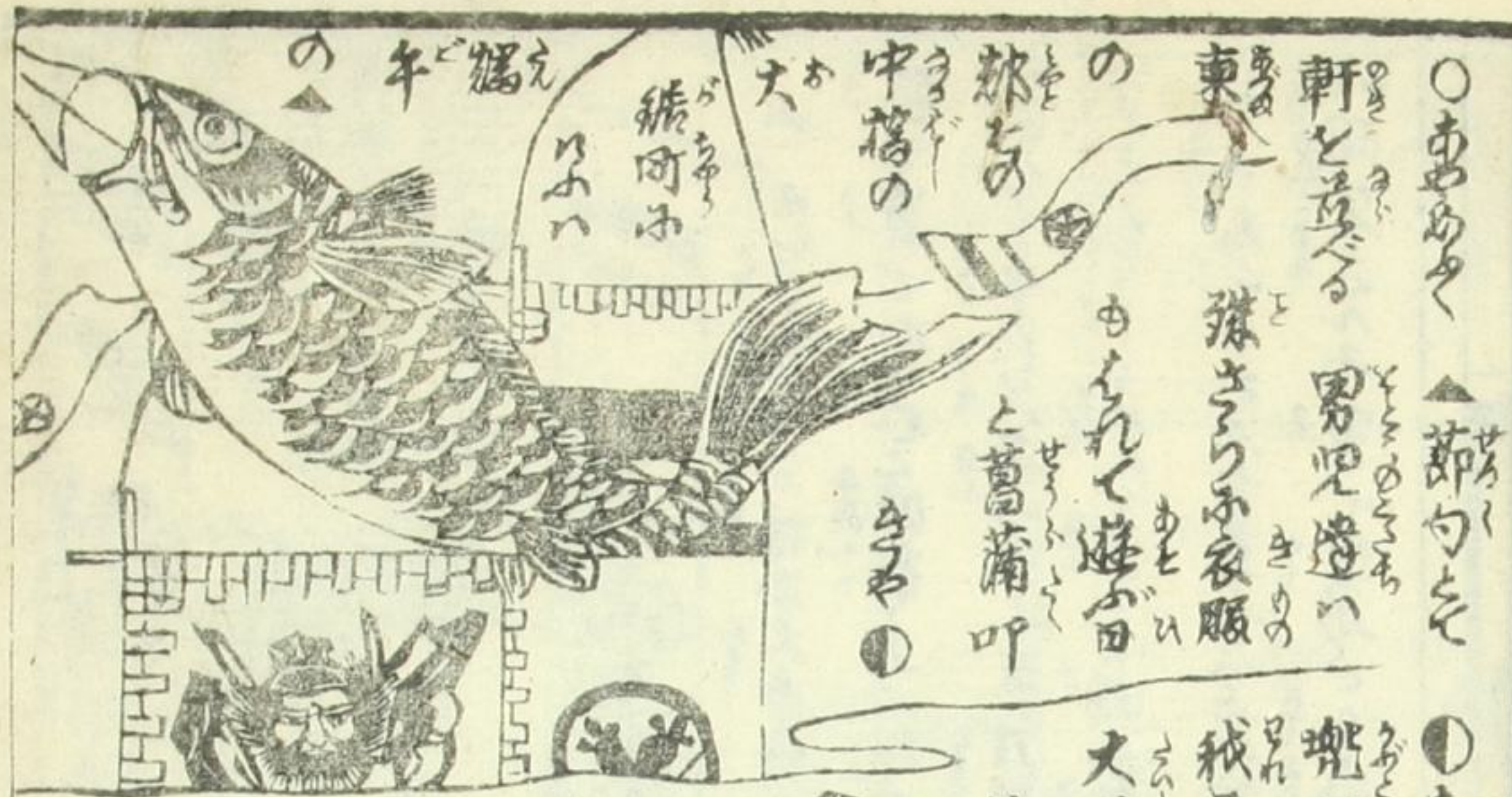




五代目坂東彦三郎
仁木弾正お杉装束

三
初

三
初



○あめりく ▲節句とて
軒とさる 男児遊ハ
東 珠さつ小衣服
の 中橋の
大 大おと持ハ
と葛蒲叩
まき

○あめりく
船と松首小舟
秋と毛おの
大おと持ハ
大おと持ハ
大おと持ハ

親と飾らぬ
お天とのと
萬世と子供
おまも船は
と持ハの
おまも子お前
の家のい

親の次女ののりて
親の次女ののりて
親の次女ののりて
親の次女ののりて

世傳一人の子傳ハ
年以漸やく

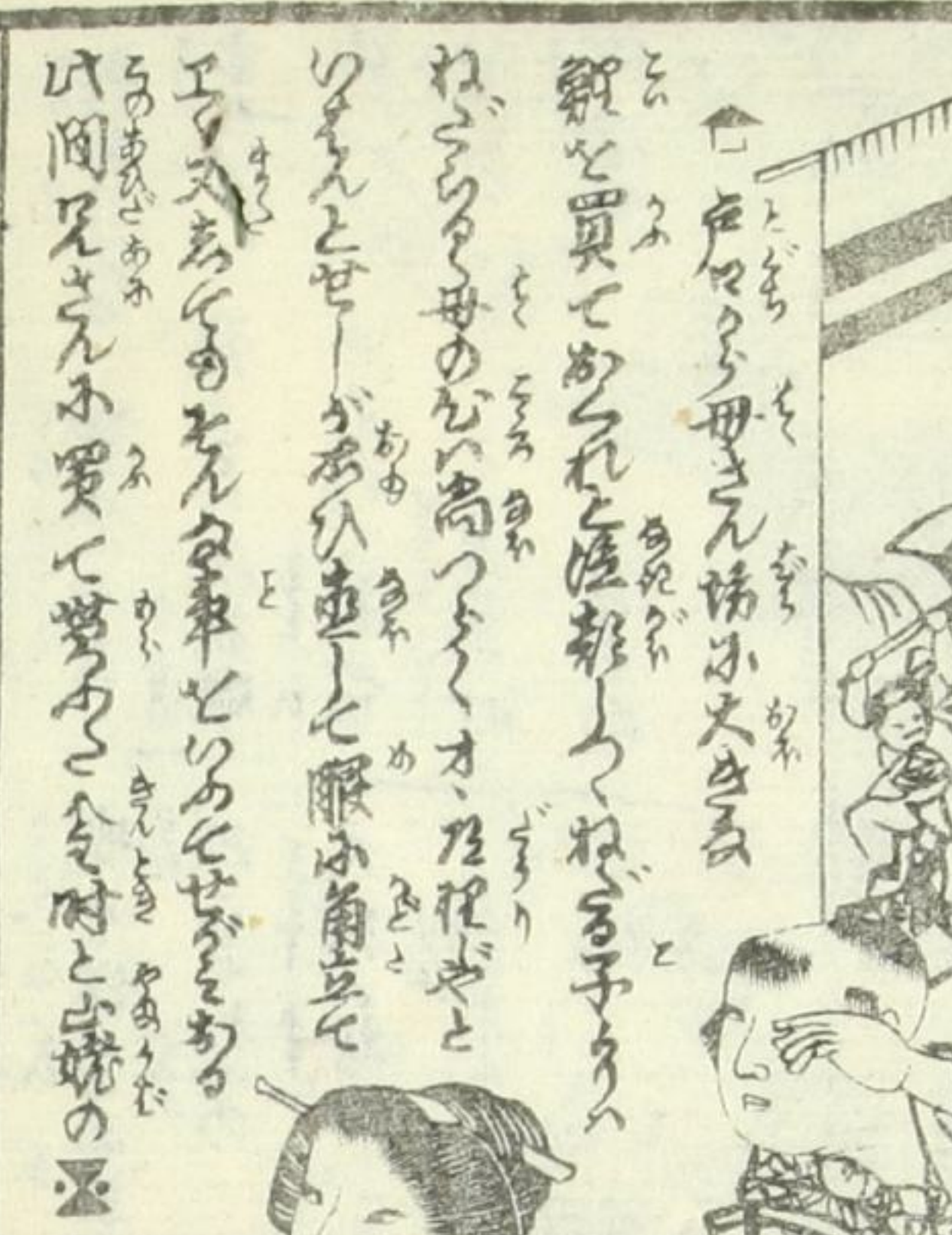


彦三郎門弟
築地の善次

彦三郎門弟



つき六ツセウ
身形ハホシトモ親
容の御一うらぬか



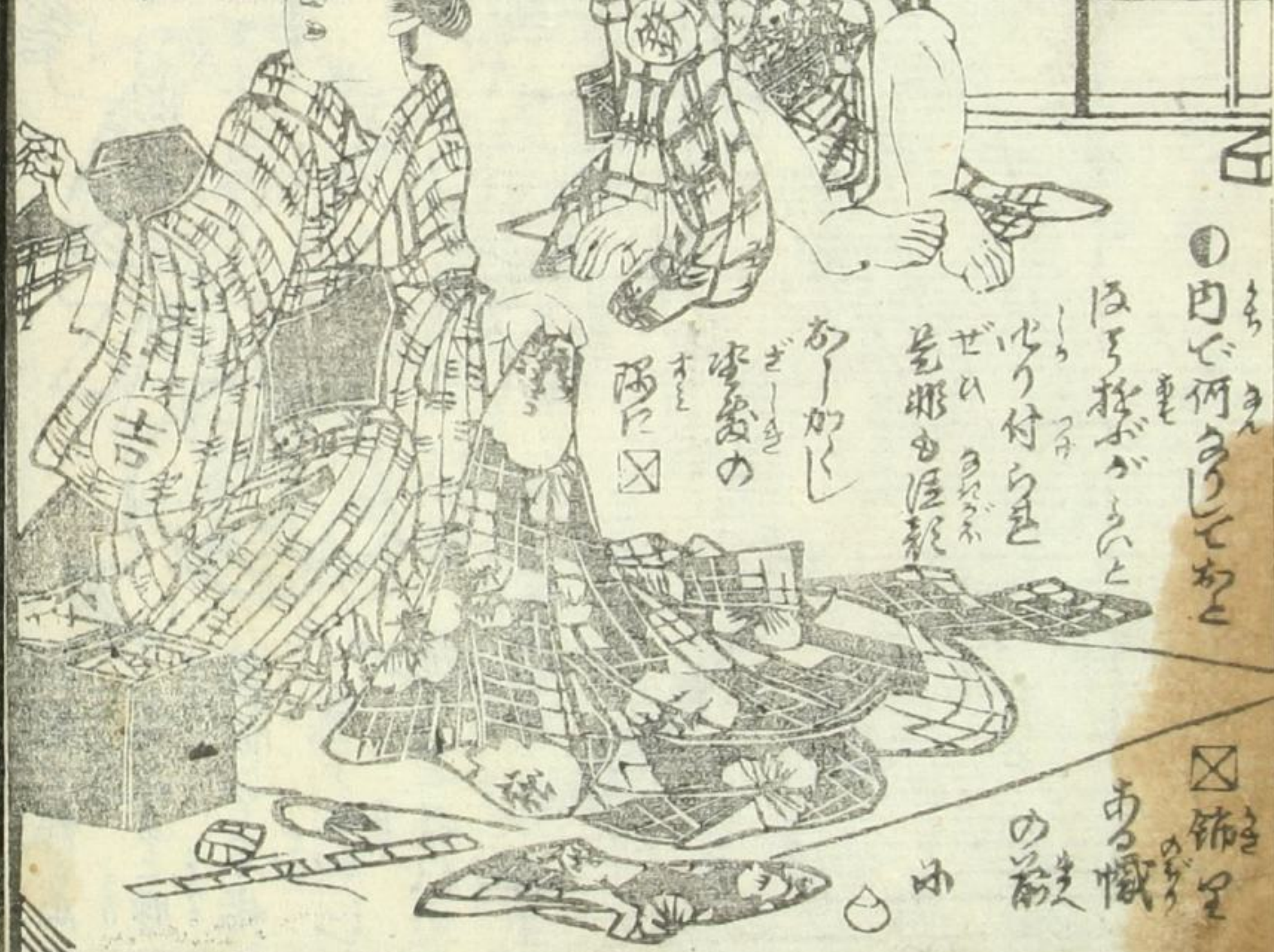
親を買ておくれと泣き
ねらら母のむい高つとくオ、た程どと
りんとせーがあひまゝと服は前豆で
エ、又あてもせんを車とりのめをせがとあ
は間足さん小買て買つて今と時と出曉の巫



巫紙懐かあ
いひまの外へ
花のあむね
そを好けな
物も欲がる



今とく、まう何と揃りて
誰かあるは後頼つくくやと
母のあひまあうてる後のこと
揃り言えあまの事との
なけい一人あてもまの中をき助けと
勤者の今半十の形態
由女のあいつ長男の



内は何きしてを
ほろ控ぶがふと
此り付ら
せは
是形も巨額
あかじ
ぎさ
夜後の
あ
飾る
の
あ
の
あ
の
あ

ふき

あゆみ

桐應

花

と

き

又

小

ら

ゆ

ゆ

は

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

酒百

酒百

酒百

酒百

今世の世に
事とあつて
今世の世に
事とあつて



かき 懸と
あはるる門は
と押船家
ら所舟えん
今日いお用
おとと入

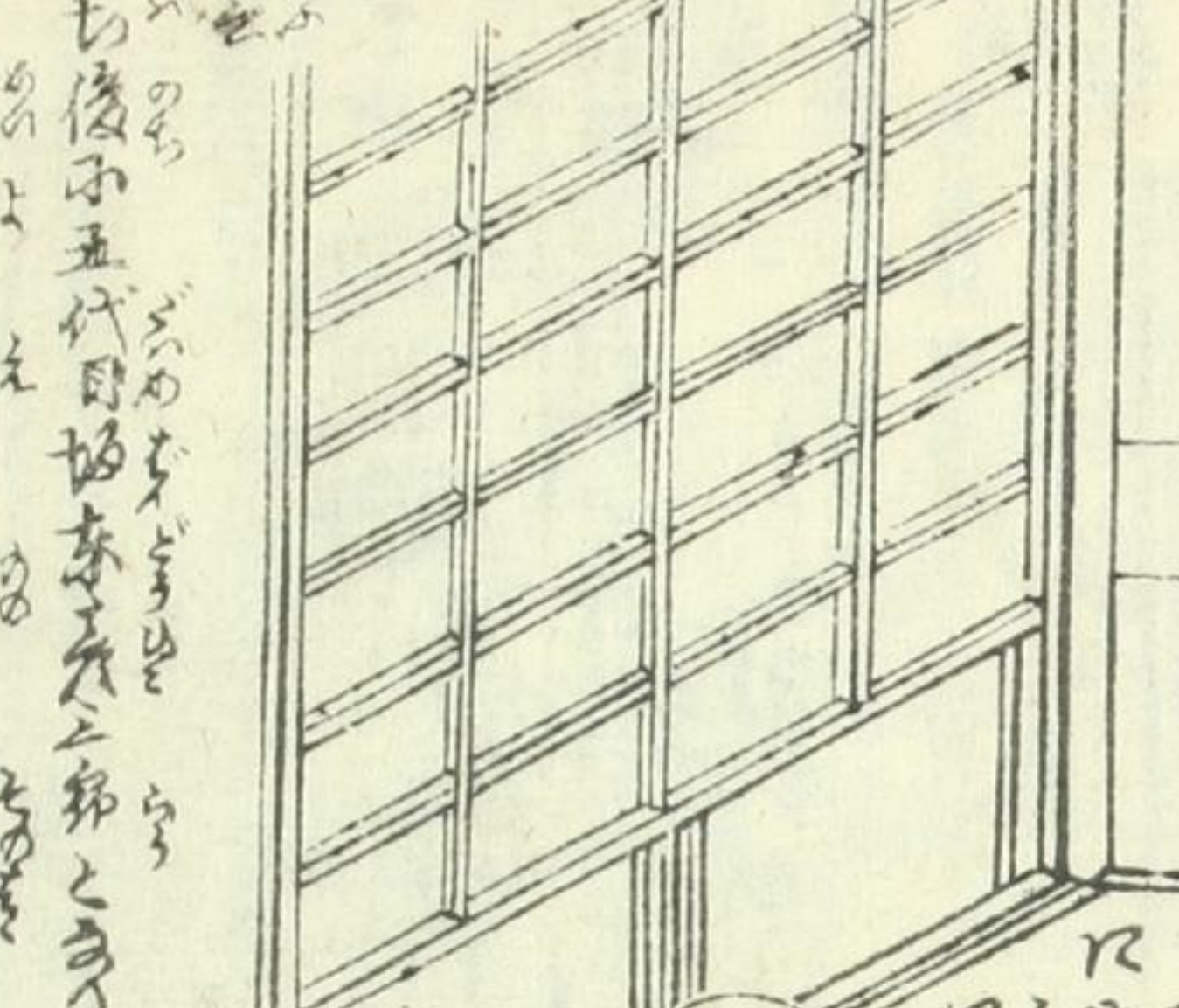


ハ星七長男の勤方め
望後の湖ふまを海へ
つとめる所の技術を
オ又何も叱らして大ま
形して外野のま
今日いお用たさく

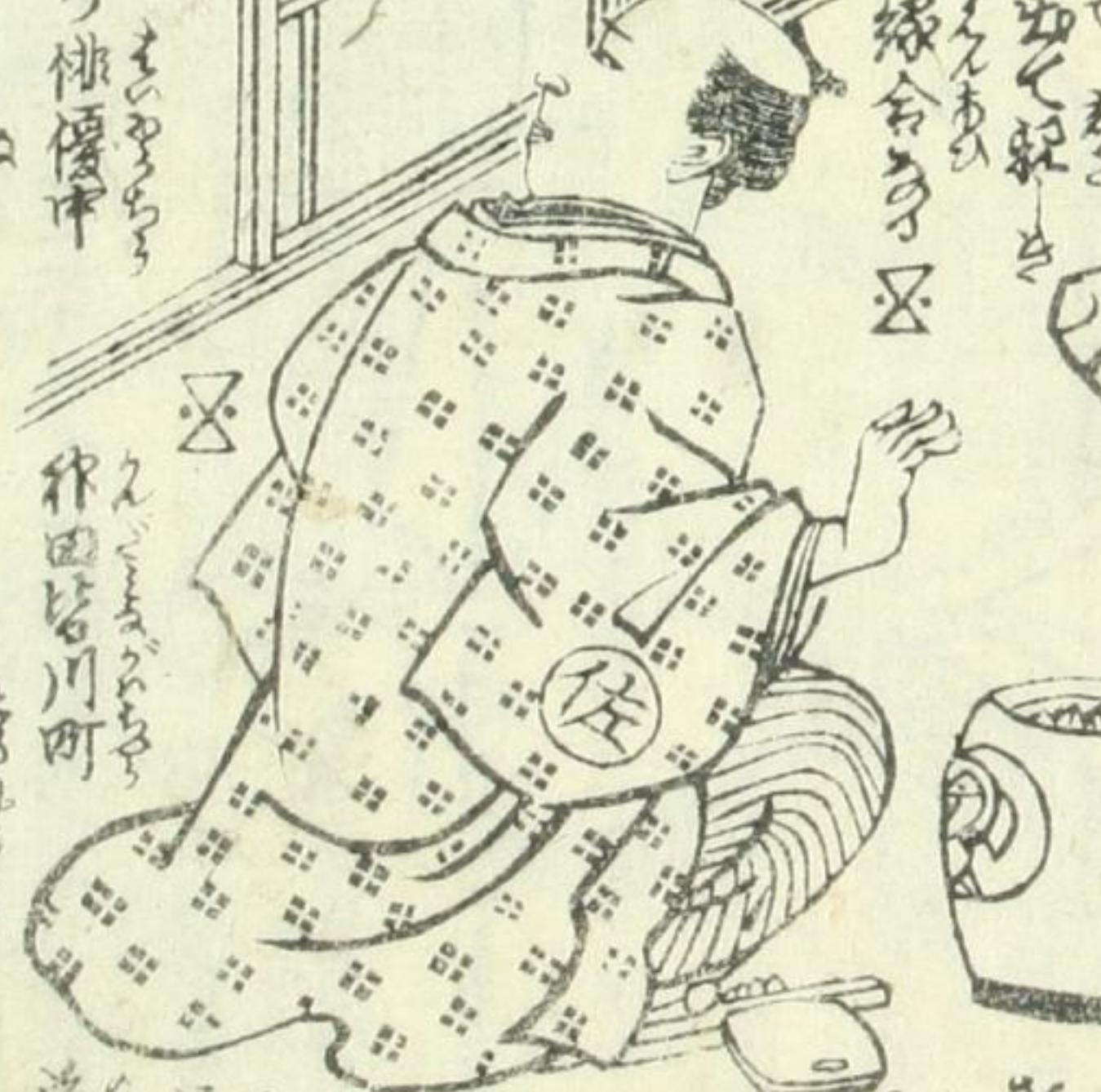


私かよへ物を買へまきか
大母さ芝居の世にて
空も格不二ふお出て

引き
らねと
おひの
そとく表へ
おひの
抑は技術と



おひの
抑は技術と
おひの
抑は技術と
おひの
抑は技術と



おひの
抑は技術と
おひの
抑は技術と

全優り或る人の興動
を世が仔細ありと
さういへば不
縁で橋かのみ
さる多橋生れの大工
さる多橋生れの大工
さる多橋生れの大工

長男の勤方め
お燦町の或る
お燦町の或る
お燦町の或る

お燦町の或る
お燦町の或る
お燦町の或る

お燦町の或る
お燦町の或る
お燦町の或る

ついでに... 子ある花びらも芝居のまねをするやどはく

退々奉とさる小使の... 隅町の芝居毎の沖ハ

日毎の換に兄と信... 望て床に入

いそぎもせ... 小生芝居

と見物し今ハ... ね長のは助と世至

細の仕ごらんとと... 様く愛之と

陽中ハ... 隅町の芝居毎の沖ハ



又あしが... 坂東三郎が分子の依十郎(杉屋)と

り出玉つて子頼... 如く(内)物見持安

と侍歩... 依十郎侍

と侍歩... 依十郎侍

と侍歩... 依十郎侍

と侍歩... 依十郎侍

と侍歩... 依十郎侍

と侍歩... 依十郎侍

と侍歩... 依十郎侍

と侍歩... 依十郎侍

と侍歩... 依十郎侍

と侍歩... 依十郎侍



▲位優の

大勢ある茶々も... 恨せば身を振杯

一人々々と具トさ... せる放執れも橋よくと

可愛さ中み守... みる踊りのみ振さど

とて目々に入と... 鉄花も跡々面

とて目々に入と... 鉄花も跡々面

① キツとある見えあて揚板と己が既
 加沢のけりりくくと肉体せう出せとんねん
 下女の番掛と肩ふかけ竹あて張と入
 肩衣のさぬおはあもせ拍のあつり
 引付て彼の原と結び体とほいたる
 正しく是波の先代蔭のねまに
 仁本強正が世が
 の柳と示ま
 せり出のさぬと
 まね
 ものと
 あつれとて一回ハ
 何れも



② 大子難深とある
 とう放歌方
 白黒由あるせう
 が安ハ疾う
 ねつとせちつ
 せだ引取てア
 赤前の外ハ
 もあつら
 己が確
 又徳
 がある
 強くねむ
 信
 とうの後の
 つく横



いそバトツとまろりに
 打美ひ甘いくと琴を
 此系産とろりへ笑ひも
 せだ小眼とをまて後飛が
 款の容体とをまての
 生取はとてえつめおじ
 か何とむに
 打美
 きやあ
 て同お佐十ねも
 以幸ふつるがまて甲
 の子とていぬもを兼て
 てま
 またおも知る通りおあまのふねのさつてんも

いある所を何とけ後
 柄とねの牌をいまのまのうと ぼんで
 実話
 同ね
 佐十ハ
 政を極
 いふい金件ある
 づまの
 小不仕合がつた

おもあるが
 今の母が
 づねに佐十ハ
 是ね
 取
 諾
 入



新三郎

○ 父の勤を慕ふと志す
兄の勤を慕ふと志す

○ 母のおおきく
赴き妾相のりて

○ 吐せしにおきよ
多苦の申で

育てあひ
おさく



○ 他人へ寄る強き
まじりあ人が

○ 父の勤を慕ふと志す
兄の勤を慕ふと志す

○ 母のおおきく
赴き妾相のりて

○ 吐せしにおきよ
多苦の申で

○ 父の勤を慕ふと志す
兄の勤を慕ふと志す

育てあひ
おさく

○ 他人へ寄る強き
まじりあ人が

のきまきあひあひおほせし
まの都くあんの仕合せな
おほきにすまにあらん

らうぶ不候ふもくお前のおも
まをすへい後と扶老の肩が横
うらふあふ私のうが里ふまつてま

む十有にしてあらんとあひあふ
うはるうとあまのひさうまひその
赴きと信十

方まゆりいほろ
初く双者苦小
用表と牧笛の
香日を標んま



又後
暇にみせ
天保十二年丑
九葉のそと
名と書と助と改め
踊り生地の箱
古にうらま

鳥田一郎梅雨日記

芳川春涛関
岡本起泉綴
三冊巾入り
五編よ切

其名高橋
毒婦小傳
東京奇聞
同

同
七編よ切

白首阿般系顛末
同

同
三編よ切

坂東彦三倭一流
同

同
三編よ切

澤村田之助曙草紙
同

同
五編よ切

御所櫻梅松録
鶴亭秀賀作

二冊袋入
十五編

亀
地本問屋
錦繪
島鮮堂
網嶋亀吉
浅草瓦町十二番地



初編中




物編
 坂東彦之 倭
 一流 中巻
 芳川 濤 園
 長本 起象 綴



揚州周延画

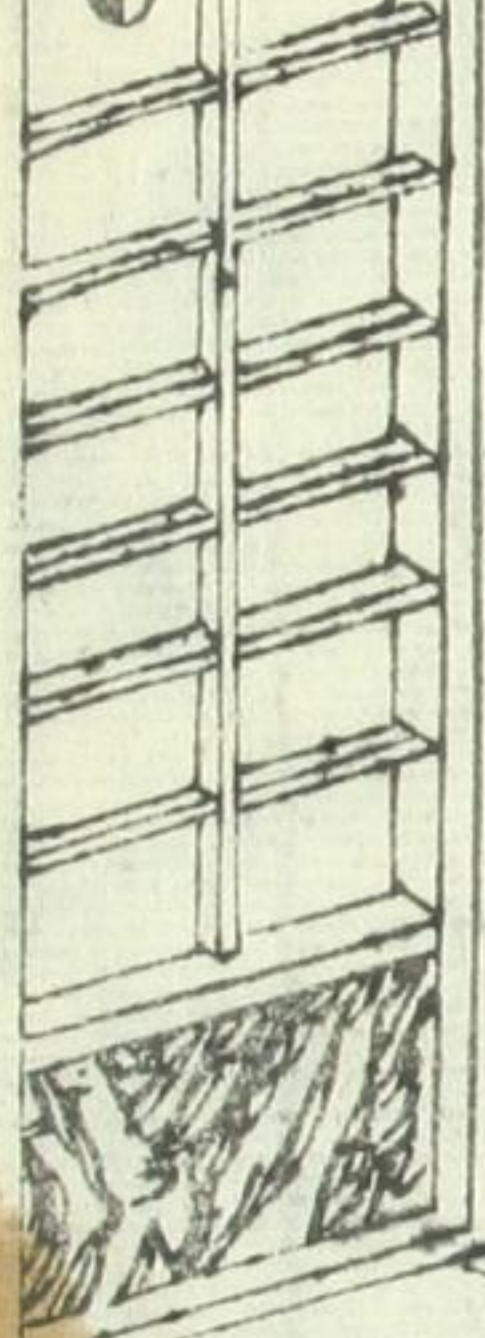
島鮮堂壽梓

尚  一 馱
 心カキカ

親方さん

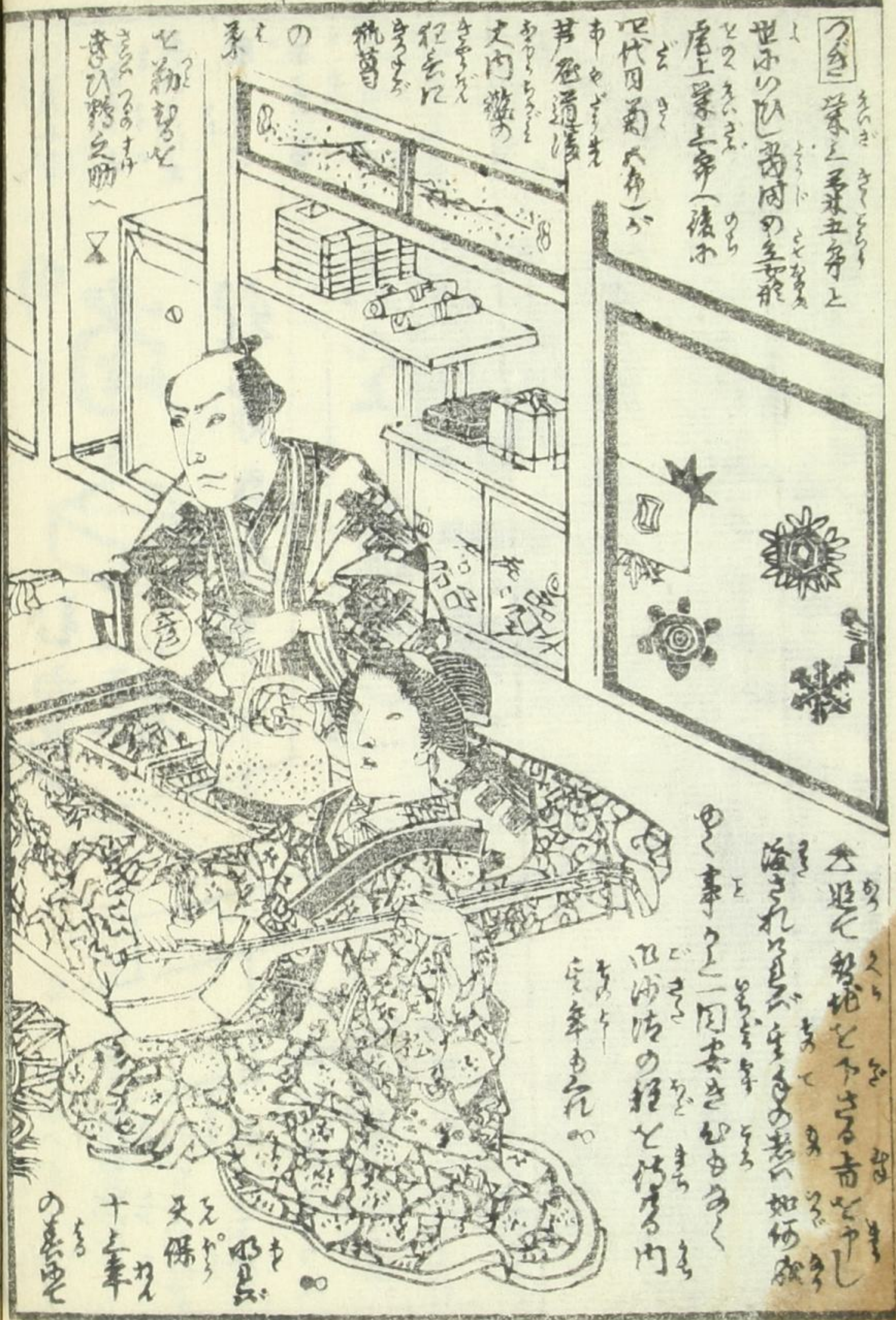
魚上 魚
 薪水夫 一 網

○義と存
 いあまうと
 昔に存之
 助と生の
 子より由
 可毛がう
 何事をも
 い通ふ
 五せふ
 家業の
 誓古の
 掛うて
 ま一方より丹津世



三切中

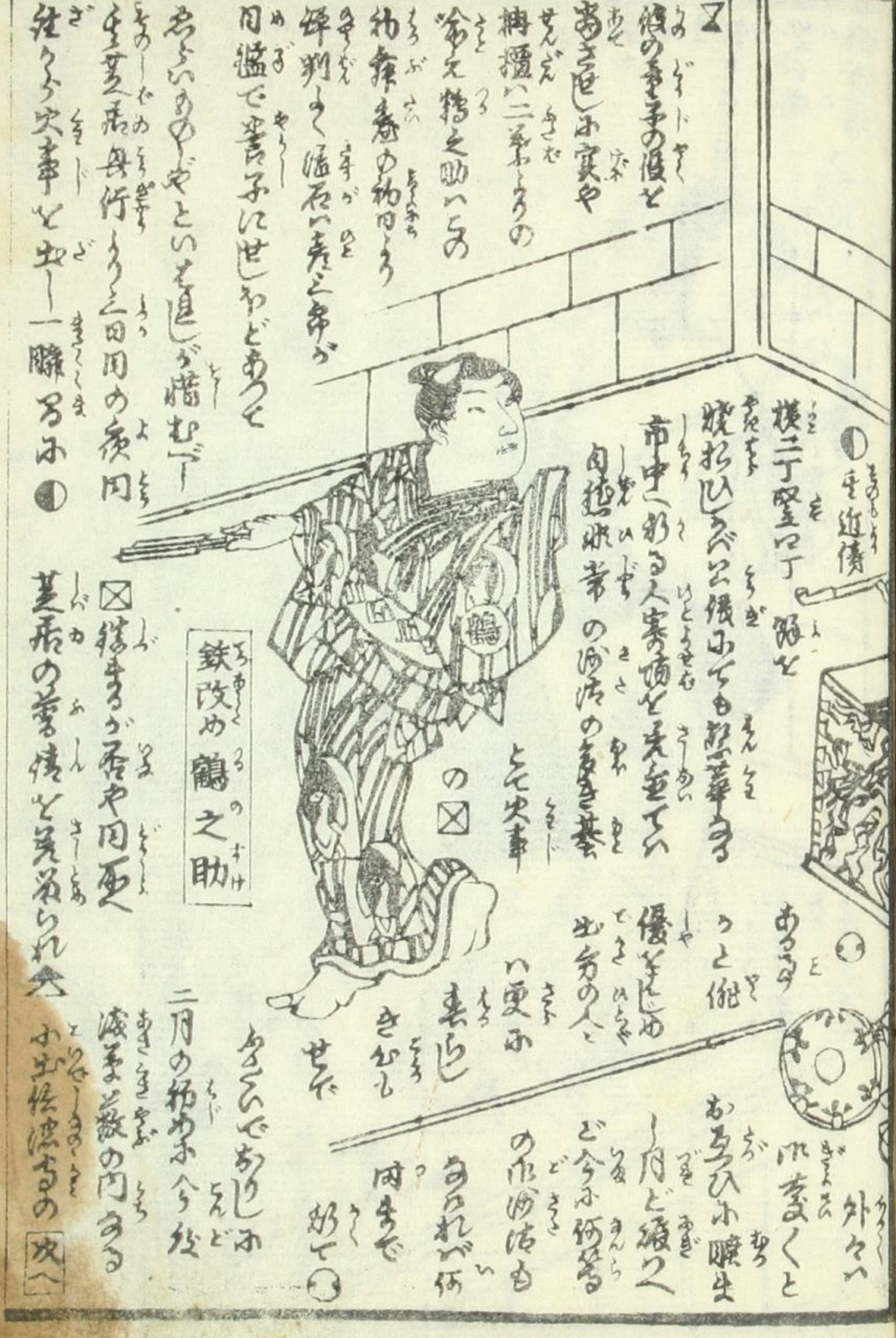
○指之助ハえり好
 めるたれハ一
 同七十七
 敬一さ
 小年
 七歳
 物一
 出
 其父ハ一
 舞卷
 凡由
 中村



つぎ 榮と五郎と
 世のついで 西岡のまを
 尾上屋と争う 後小
 四代目菊(六舟)が
 市やどき先
 其を道後
 丈内遊の
 狂言に
 ままが
 桃尊
 七輪習と
 まのつるま
 まひつ助之助へ

大退之助地と下なる吉とやし
 海されはるまの老の如何
 事と一問去き由あり
 江戸流の程と信る内
 今年も元

外々ハ
 水まくと
 お互ひ小暇生
 月と縁之
 今小何答
 の市河流由
 自れ何
 因きで
 好て



又 傳の事手の腹と
 あま(小実や
 梅櫃(二系)の
 命を傳之助へ
 物舞巻の初四
 弾判(一)福石(一)と争が
 月鑑で書子に世やどありて

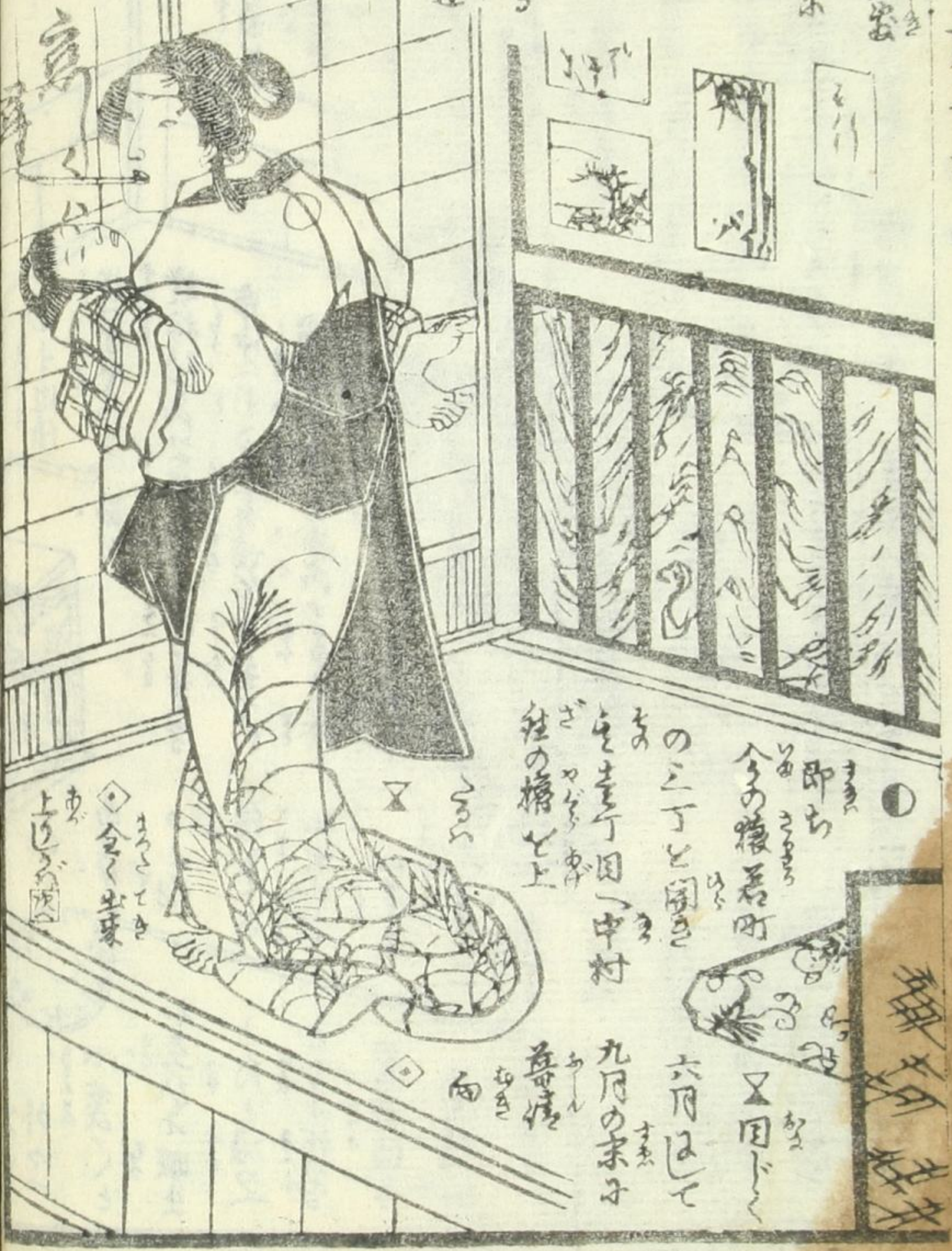
手近侍
 横二丁堅三丁 源と
 横招ひる公儀山て由華身
 市中(形)入実物と夫並て
 自徳状の海流のまき茶
 とて史事
 の

鉄改め鶴之助

鉄改め鶴之助
 二月の初め今分
 海まの敵の内なる
 小出佐渡守の攻へ

つぎ下居坐
中と又地
下居坐
田業ハ
狭い
地引續

一田ハ
警
留り
偏
併



即ち
今の様所
の丁と園
まき丁田中村
社の橋上
六月はて
九月の末
益
向

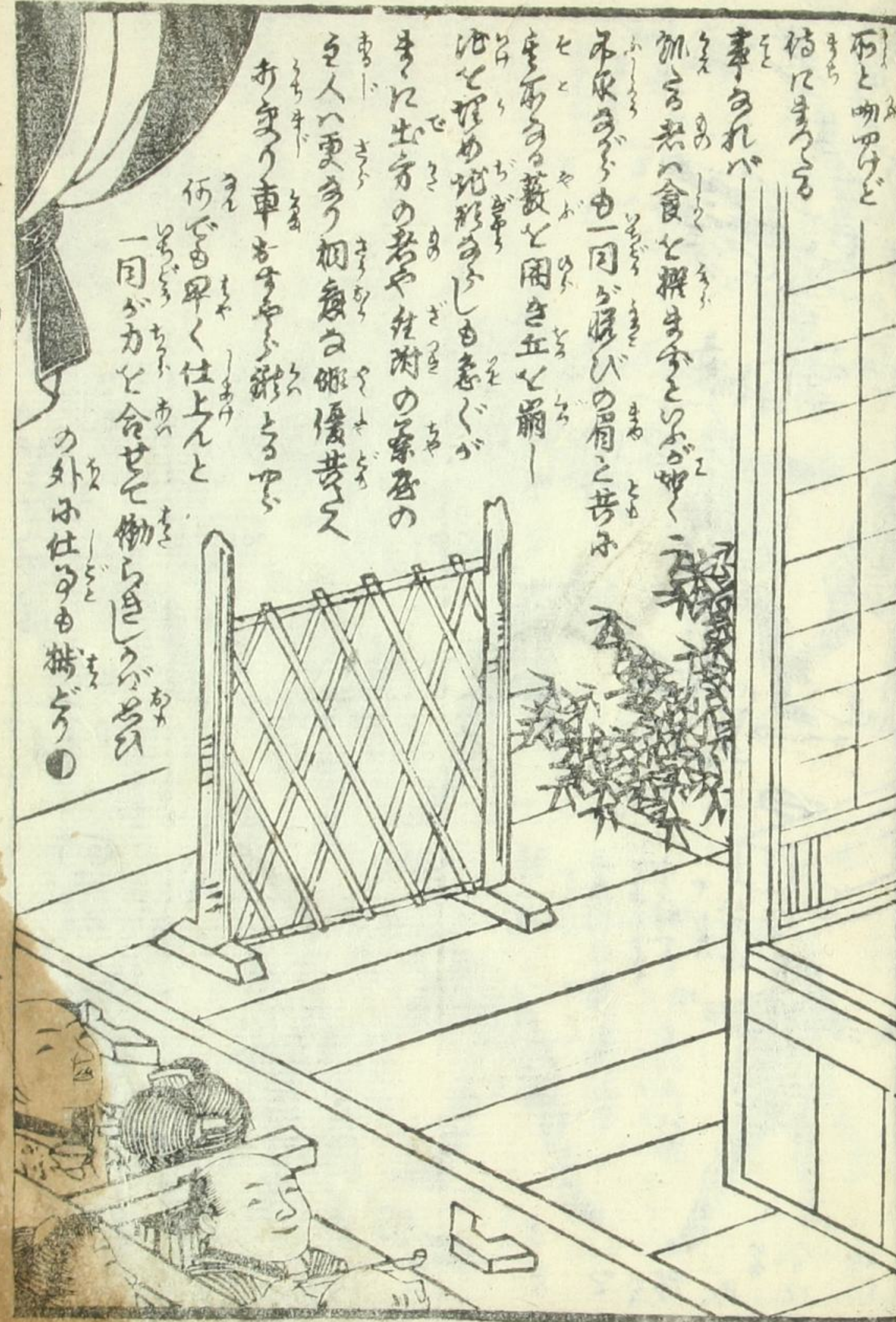
今く出
上

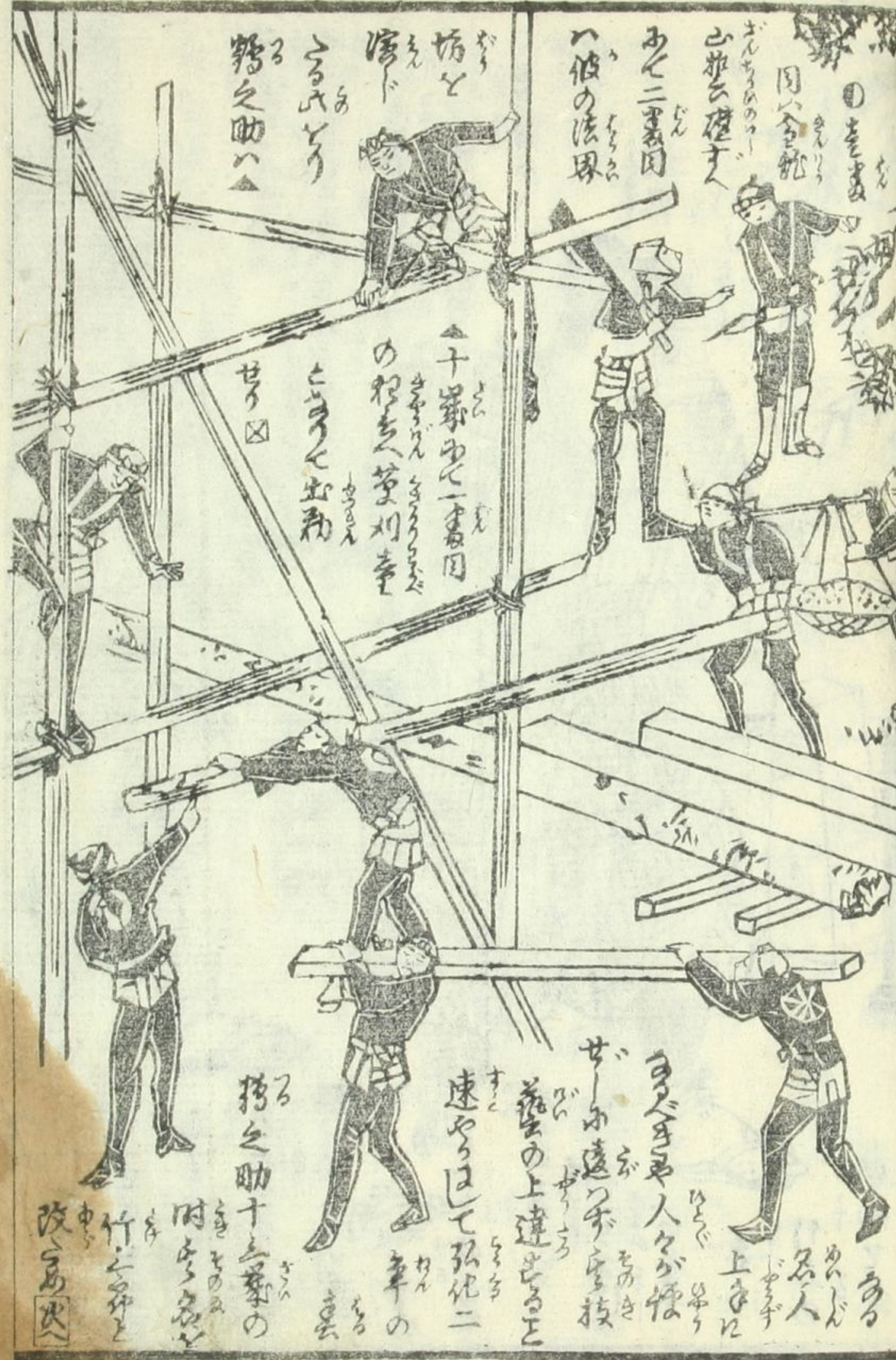
石と吻
付にま

事なれば

加言悲へ食と撰ま
不取ま
をある敷と困さ
池と地
まに土
人へ更
おま

何
一田
の外

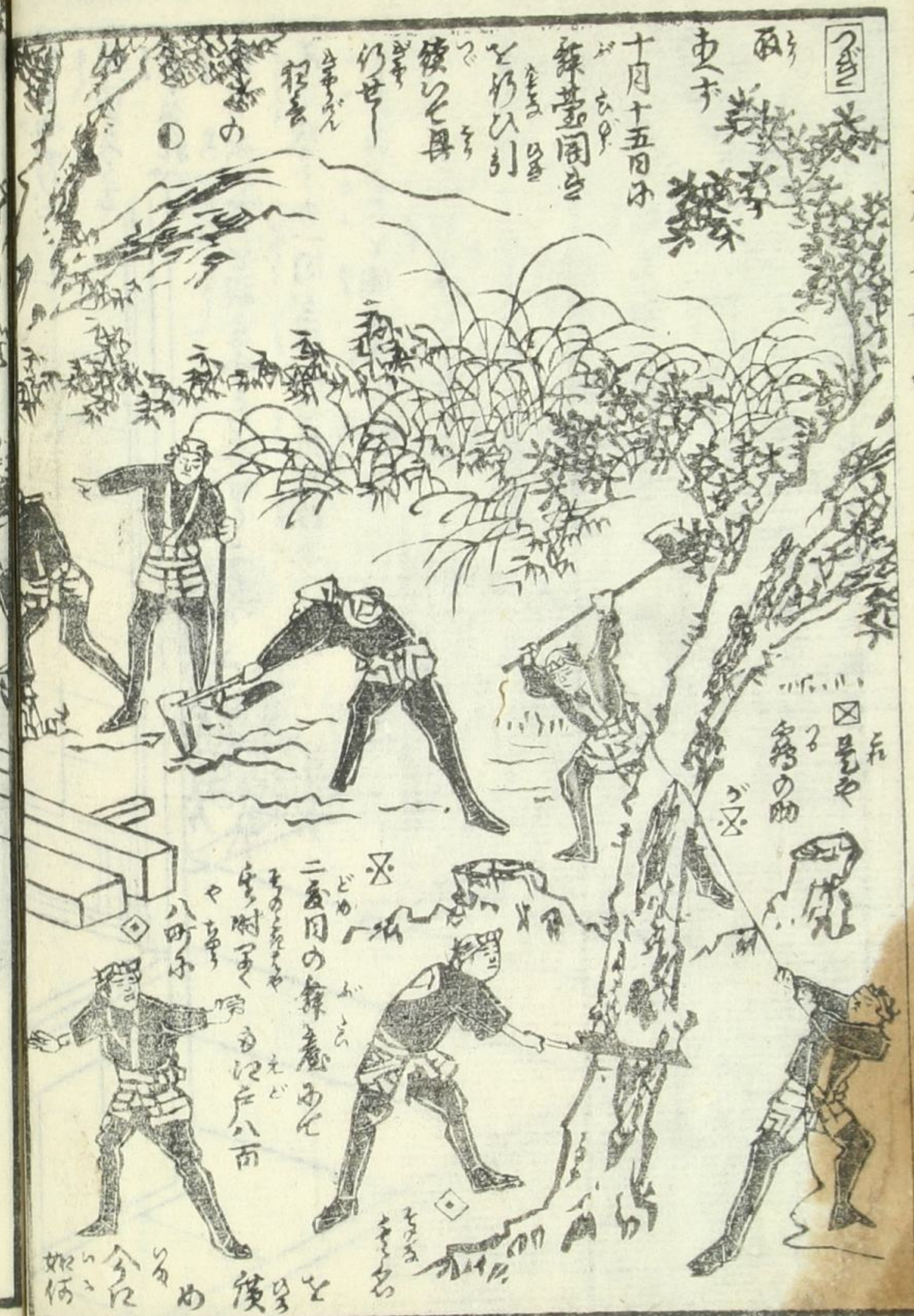




① 土を敷く
 ② 土を敷く
 ③ 土を敷く
 ④ 土を敷く
 ⑤ 土を敷く
 ⑥ 土を敷く
 ⑦ 土を敷く
 ⑧ 土を敷く
 ⑨ 土を敷く
 ⑩ 土を敷く

十層の二重目
 の柱を並べ
 土を敷く

土を敷く
 土を敷く
 土を敷く
 土を敷く
 土を敷く
 土を敷く
 土を敷く
 土を敷く
 土を敷く
 土を敷く



十月十五日
 舞臺の
 土を敷く
 土を敷く
 土を敷く
 土を敷く
 土を敷く
 土を敷く
 土を敷く
 土を敷く
 土を敷く

土を敷く
 土を敷く
 土を敷く
 土を敷く
 土を敷く
 土を敷く
 土を敷く
 土を敷く
 土を敷く
 土を敷く

つぎ 金とまは彼教を
頼りにかやくと後物じ
形とる内は御やく

× 幸ひ常々

来く連雨舞

嘉へ程の道

ふ間の外

是ぬのそり

灯つて足功若々

見物いさる程奥深い

竹藪と又の胃が物

又い方の
継定なき

及つぬといひ

終放同く奉

結城外といふ

標

子供

あて

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

さき

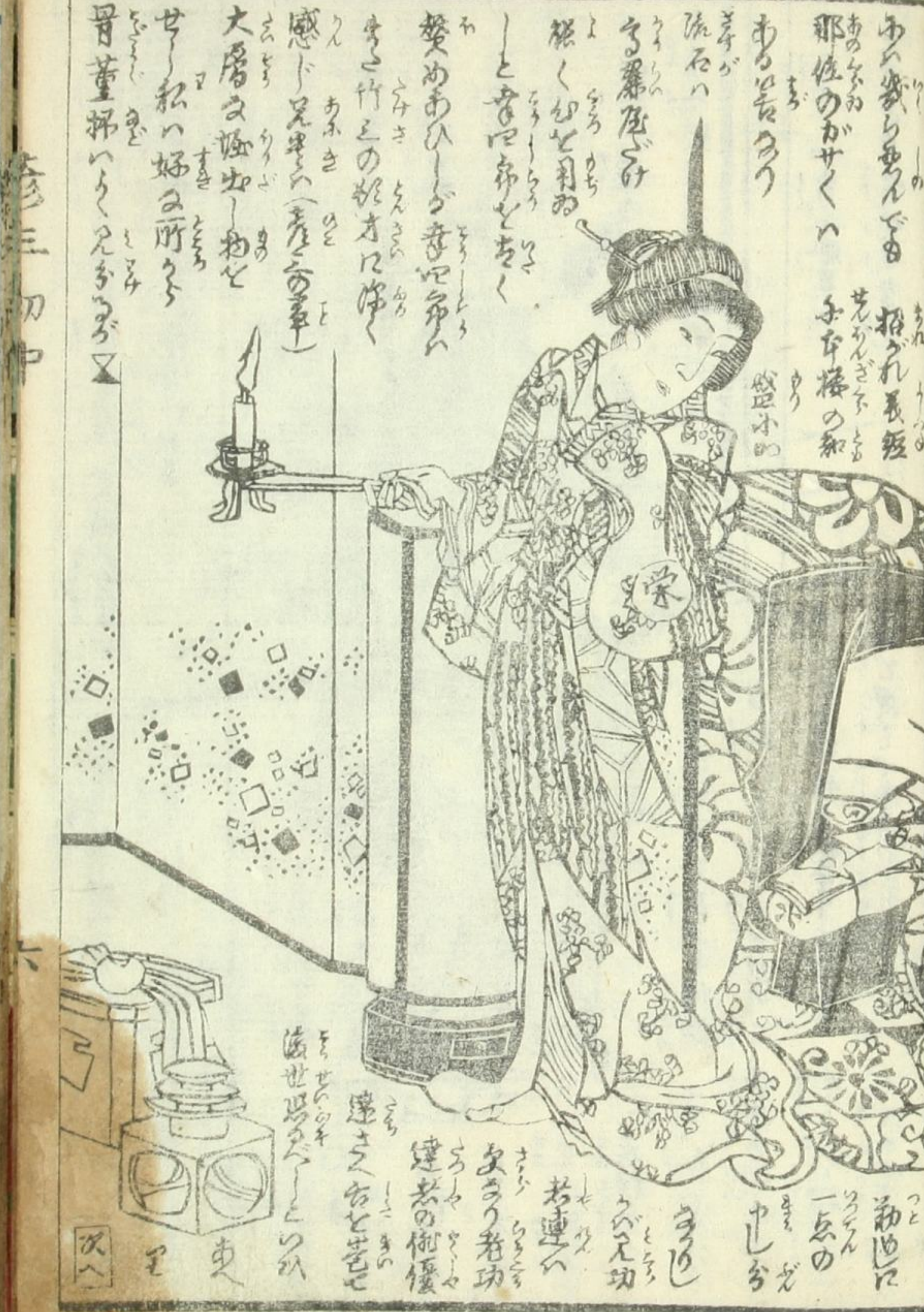
さき

さき

さき

さき

さき



つぎ 船で竹とが十五歳とまり十月廿日

海軍清桂の親見世程云ふ
出初しに奴才代官の
五条と助の役と浪
舞を志す

元振の披露
とほまより
蓋と出立監
のふんをい橋の
一妻を贈り

何小愉えん操もあいつの
飯下幸ひられば妻と扱
之を物殊の歌と 勘太改め懸二
んんかのとまうらまへと
慈み出ては地地地と
縁女と撰もりに



△此の二丁目の市村屋のきん元
の長女お茶とついでに聞かぬ
菊五郎が実の姉妹を同
丁後二八の妻
時十八才
自じが
又ねと音

△此の世に情多きとをを縁嫁
しての知れりふれと人と扱
申し色縁候もねえとあつて
吉田と撰もり海は風川出



何小愉えん操もあいつの
飯下幸ひられば妻と扱
之を物殊の歌と 勘太改め懸二
んんかのとまうらまへと
慈み出ては地地地と
縁女と撰もりに

久今い少もむ祝す

東海道



何不自由

のまゝ二人の
 子供が逃ぐ小世
 小舟にのりて
 くる小舟

● 書父の事名を竹之
 小浪り自をい
 名を改め
 一即ち林三所

五代目
 坂東
 一い実小
 安政
 四年

の事西暦は年二丁目の



我まの
 迎る内口
 女五郎とあり

全書の上達する
 うん々の勸め
 子孫をたすむ

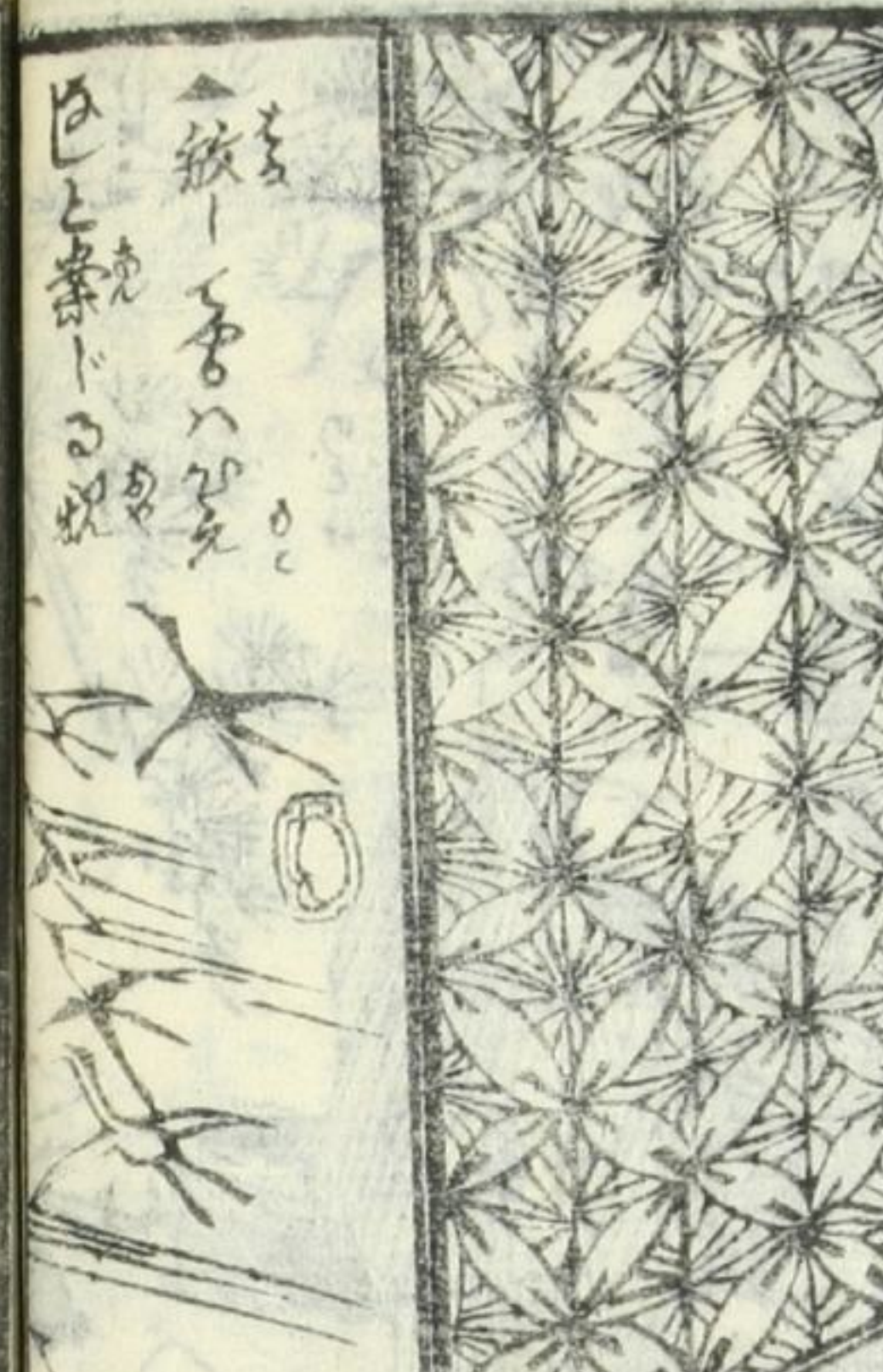
市村はやく牛若お芳
 の役を勸めね中改
 女披
 其何と
 連しとあり
 音相なる
 不道と概
 夷長痛の果ともどもめは海
 とありけりし想は由成る事
 年ハ未だ我流と定まりとせは以上
 の修仍のふ上分へせりしを流
 と廢んをいしと事由を告(因)



父不明せむひい
おれは由生春四茶
おれは由生春四茶
おれは由生春四茶
おれは由生春四茶

二燈の橋を渡りて
海を下筋小舟も級業
の左面とたが途中で修
ま、尾張名古屋や外
て下芝居つ具行
まうねて笑ひの梅の
浪花一息もあは

○是の由
と浪花へおれを
おれは由生春四茶
おれは由生春四茶
おれは由生春四茶



一紙一香の
はと素の
おれは由生春四茶
おれは由生春四茶

おれは由生春四茶
おれは由生春四茶
おれは由生春四茶
おれは由生春四茶



の
おれは由生春四茶
おれは由生春四茶
おれは由生春四茶
おれは由生春四茶

おれは由生春四茶
おれは由生春四茶
おれは由生春四茶
おれは由生春四茶

御優中あり稀なる良男とて公と

悦ばしあれはと云ふる女子も

多のくは同人の仇儀

と遠ひ語り女を

好まねい近來世

ふいふ會地獄と異あり

容易に撥るる仍ひ

のさけより何事も甘美

みく玉の杯底は

男よ愛人もと云あるてこが

をさの叶のぬ後を待まふ

罵りて生を待たひ候もあれ

と云ふ親念くまのつる

婦女も多なる中お

用和今橋通りで多なるお著は

去る良辰と云ふ振子の

のれ勢と云ふ源

くまると云ふ

ひまめ

小付

女木の

活あり

島田一郎梅雨日記

芳川春濟園 三冊 竹入り 岡本起泉綴 五編 よき切

其六名高橋 毒婦小傳 東京奇聞 同

同 七編 よき切

白菅阿般系顛末 同

同 三編 よき切

坂東彦三倭一流 同

同 三編 よき切

澤村田之助曙草紙 同

同 五編 よき切

御所櫻梅松録 鶴亭秀賀作

二冊 袋入 十五編 戸出板

亀地本問屋

浅草瓦町十二番地 島鮮堂 網嶋亀吉



坂東彦三倭一流

芳川春涛
岡本起泉

初編下





三下



① 相備と云ふ
 夫れと或守一刻千金の
 不抵罪の横扱と云ふ
 生世と云ふの條と接し
 糸にて折橋と云ふ
 上



又 子奴鬼の悪し記亦長を弁由
 □ つめたる急の剛濁り
 清きせと長老の杖も
 汲きて杖勢の白泥濁り
 不息小過おあつて梅
 て及を心とせ女
 角と持せるう放
 互いお好く
 こそ若と逢
 た分が金

風はさき
 多ふい
 か幾ホ
 遠く道に
 彦ま
 掃き
 英男

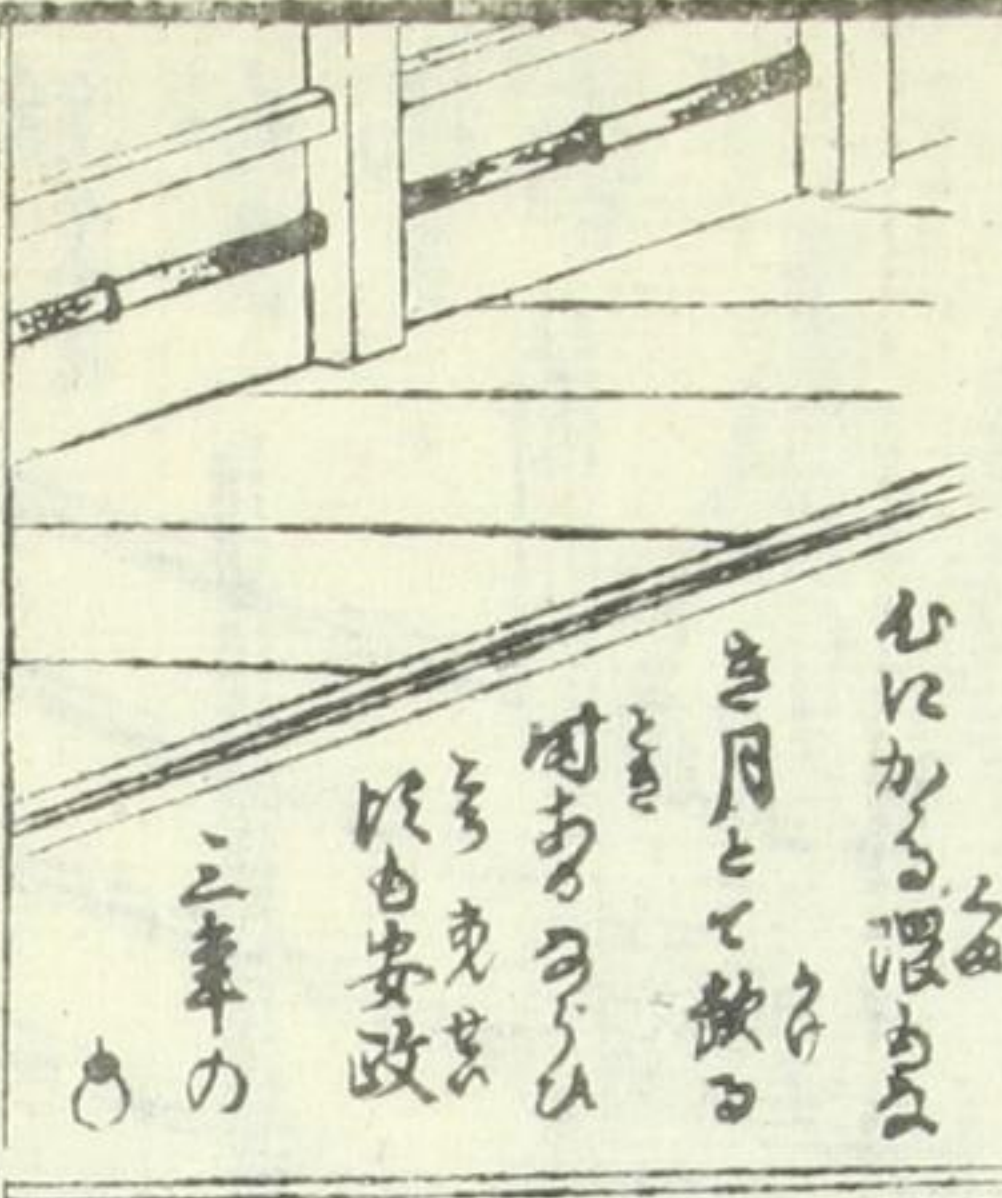


の
 むの散りつた好あで然不
 勝もありけりそ男集に
 京原のこめぬ又あまの
 めうをわ整が勝の切ると又

五からんと
 まくの女
 お幾と
 備ひ彦をが女
 妻と披露とて表状へ
 招くお莊へ添居とてく
 家督彦をに懐りくか

夫を去りて歸らば、其の計りて
 夜にば、寂しく、まじりて入の
 男の思ふは、便けの事、五季晴れ
 て、又、娘と、契り、あつ、ま、牛、一、つ、ら
 心にかゝる、濃、あ、ま
 き、月、と、て、故、日
 町、あ、る、ら、ひ、ひ
 以、由、安、政、の、事、の、あ、ま、

高、清、ら、か、ま、ま、な、い、な、い、の、あ、ま、
 ※、あ、ま、の、あ、ま、と、ま、ま、の、あ、ま、
 心、利、子、孫、の、乳、母、を、く、か、れ、
 小、児、の、乳、母、が、
 乳、母、が、
 名、徳、と、
 又、も、送、り、
 中、小、の、
 あ、ま、の、あ、ま、
 原、く、除、せ、し、ま、
 混、雜、も、
 一、勤、め、
 心、を、ま、ま、に、
 作、せ、ま、あ、の、



十月、初、日、
 長、馬、の、あ、ま、
 病、か、か、り、

あ、ま、の、あ、ま、
 ま、り、あ、ま、
 野、田、の、あ、ま、
 海、日、あ、ま、

○、醫、業、論、も、あ、ま、
 あ、ま、の、あ、ま、
 系、と、あ、ま、
 小、遊、小、果、放、
 あ、ま、の、あ、ま、
 の、慈、傷、大、あ、ま、
 中、小、の、あ、ま、
 あ、ま、の、あ、ま、
 と、あ、ま、の、あ、ま、

あ、ま、の、あ、ま、
 ま、り、あ、ま、
 野、田、の、あ、ま、
 海、日、あ、ま、
 混、雜、も、
 一、勤、め、
 心、を、ま、ま、に、
 作、せ、ま、あ、の、



さきころのぞきん奉
は家と主殿一は思
大い



さきころのぞきん奉
は家と主殿一は思
大い
ふ育てあげは
のあはれをつさる
と呂宋一はして
あゆまをまねて
そんな事とりの
ふね
さきころのぞきん奉
は家と主殿一は思
大い

さきころのぞきん奉
は家と主殿一は思
大い
あゆまをまねて
そんな事とりの
ふね
さきころのぞきん奉
は家と主殿一は思
大い

さきころのぞきん奉
は家と主殿一は思
大い
ふ育てあげは
のあはれをつさる
と呂宋一はして
あゆまをまねて
そんな事とりの
ふね
さきころのぞきん奉
は家と主殿一は思
大い



さきころのぞきん奉
は家と主殿一は思
大い

さきころのぞきん奉
は家と主殿一は思
大い

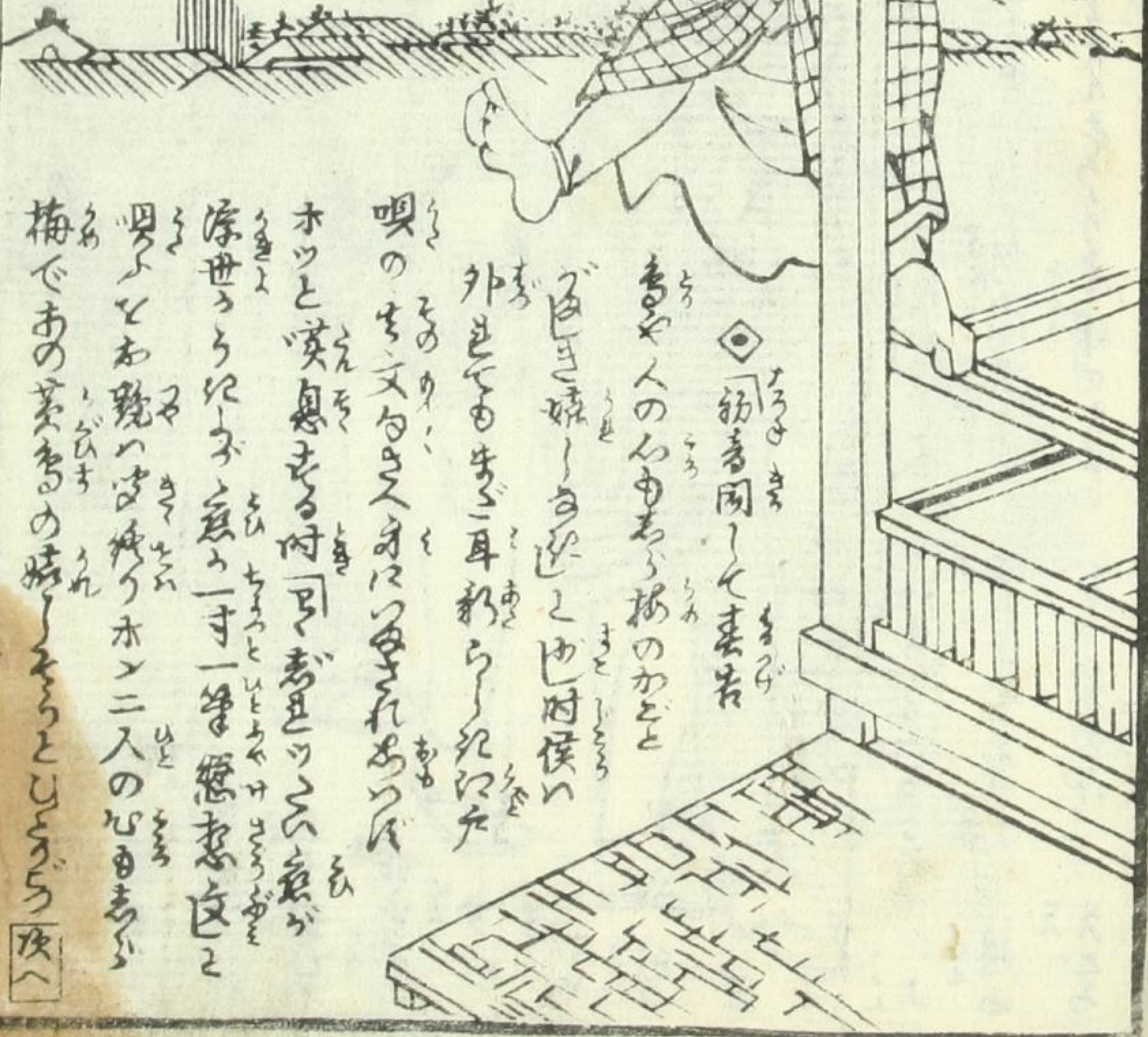
さきころのぞきん奉
は家と主殿一は思
大い

小厮と連立か箱小業内さまを
 中の芝居へ赴き二間の様をみて見物
 せられたるが所家の旦那に杉は家
 風と見え目も怪



亡まお
 あろ
 ウツトリえ披露
 お角い早急
 見て取く何う頼りに披露つ

とを
 病の毎小
 あまぬの
 一間の中に閉籠り板の障子で
 傍り小閉き長閑さまの顔面と
 眺る折々
 多々如月の名や
 梅小さくも
 附し由近所の雅さう



◇ 幼き園へ
 外世でも
 唄の
 ホツと
 梅であの
 夜

後の後を
お押掛け

さあお走らうと
いひついで入る
来しあふ人
あつた女醫婦の
お角のや舎持
あつたお糖の粒也



打ち入り先日お走らう
入つたあつた

あつたあつた
あつたあつた

あつたあつた
あつたあつた

あつたあつた
あつたあつた
あつたあつた
あつたあつた



あつたあつた
あつたあつた

あつたあつた
あつたあつた

つぎ 即ち小文と申すは

例うかお南がモシを嫌

けお登げけあこまらソレ

先遣てあ徳さんぐ

持てあ那の

中持心水磨員

にとりそらくと

ねごうけり

願でうけうけと

ち短く小書修り格初の人妻

と共は徳勝(海)とと働きあつて



● 藤原小

極本氏へ秋出入坊きと

きい量と怪お手

後、ちと首尾張

事と任運員に用

どの中持とあの上置長受の令い候

ゆい子とあはあ(届)けあお遠

それと返事のをあまか候へ

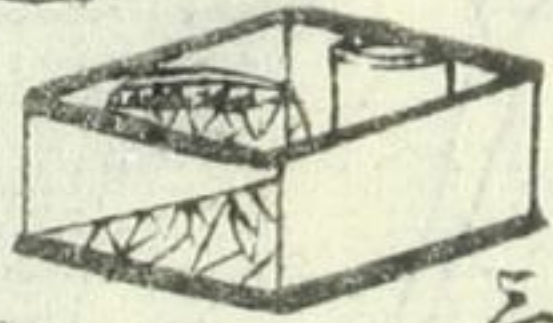
来り保書と托つけあま

長見物あ出うけあもあま之あは格初と

はあ角と徳勝が種々と心とせとせとあま

挨拶さ之もあは候あ候い候とあまの十寸

鏡像優あまれの男の心とあま



● 那のまのと投初よ

馬お密候の信あ

うみからねと烟

子にあて徳勝が

今の吐い首回あま

双輪あま病にあまの

まごあ彼奴あと影んて

実地あませ候とあま

上へあまはあを嫌が

● 伏



● ちるまのあ

使はあらと或田甚長あ相の

難波橋

三巻の折
柄どおし

よめを居るといふまき
まへて杖をさし降ろ

韓佐とほてえの

智恵あふまき
元ひきや
是の奇妙と
あはれもあふ

まじと押る

お籠りあがり
とえ早

惟もまき
あはれ

口名もろれ一統と

いふ藝妓が先初
地はしと体息

とわん

密偵と儀

あはれ細が

あはて頻

あふ獨り

悲泣き

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ



まのと
あはれあがり

一巻の
晴りき

あはれあがり
いふ早

あはれあがり
あはれあがり

あはれあがり
あはれあがり

あはれあがり
あはれあがり

あはれあがり
あはれあがり

あはれあがり



島田一郎梅雨日記

芳川春涛撰 三冊 巾入り 五編 よき切

共名高橋 毒婦小傳 東京奇聞 同

同 七編 よき切

白苺阿鰐顛末 同

同 三編 よき切

坂東彦三倭一流 同

同 三編 よき切

澤村田之助曙草紙 同

同 五編 よき切

御所櫻梅松録 鶴亭秀賀作

二冊 袋入 十五編 戸出板

龜 地本 錦繪 問屋

浅草瓦町十二番地 島鮮堂 綱島亀吉

010190516860



坂東書院三記
三冊之也

